

「ハレとケ」 通信

第1号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ
暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築

(1) 五台山竹林寺

五重塔

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

【お正月の迎え方】【花びら餅で抹茶を一服】

花ある数寄屋 (1) 「建具」

わたしたちが提案したいのは、依頼主の美学を反映した空間。
品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、数寄屋の魅力をご紹介します。

中津万象園「花の歳時記」(1) 梅

かさねの色 (1) 「椿」

「遊び」は、

人生の魅せどころ。

企業人のための茶の湯を、中津万象園にて新春より始めます。



物語のある建築（1） 昭和五十五年 設計施工／富士建設（株）

五台山竹林寺 五重塔

台風がしばしば襲来する太平洋岸。寺にとって悲願であった五重塔再建だが、「無理だ。ようやらん。」と建設会社から断られたこともあるという。だが、その再建話に「日本に現存する五重塔は三十数基。やれるなら、自分は建築屋として日本一の幸せ者だ」と手を挙げ、『台風で倒れるのに、讃岐の阿呆が山の上に五重塔を造りよる。』と笑われながらも、塔を完成させた「幸せな物語」が、この建築には、ある。



塔づくりにかけた情熱

—真鍋さんの思い出

五台山竹林寺住職

海老塚 和秀 氏

高知市近郊にあつて、北に四国山脈の山並みを、また、南にはるか太平洋を一望し、そして眼下に高知市街や浦戸湾を見下ろす景勝の地、ここ五台山。その山頂近くに位置する当山は今なお身近に豊かな自然が残るためか、市民の憩いの場であり、また、開創以来の長い歴史に培われた信仰・文化を求めて四季を通じて多くの参詣者や観光客が訪れる。そして、春・秋のシーズンともなると、弘法大師の霊跡を巡拝するお遍路さんの鈴の音で境内は賑いをみせる。

当山五重塔復興のきっかけは二つの熱き心の出会いによる。すなわち、当山責任役員・総代である森岡正重氏（大阪高知特急フェリー株式会社社長）の当山外護の熱き心。そして、富士建設の真鍋社長の建築にかける溢れんばかりの情熱。その出会いであった。

それは全くの偶然であった。たまた

ま、当山が有する室町時代、夢窓国師作庭の名勝庭園を見学に来られた真鍋社長が帰り際、本坊玄関先で、旧知の間柄であった森岡総代と顔を合わせたのである。

この時、森岡総代より五重塔復興の計画を打ち明けられた氏は、即座にこれを引き受けられたという。しかし、五重塔建立は、決して容易な工事ではない。まず、近年ではその例を見ない。それ故、造塔の知識や技法に精通した工匠も今では数少ない。まして、この地は夏ともなれば台風の常襲地である。それに加え、当山は五台山の山の上にある。そこに仏塔を建立しようというのである。社寺建築に携わる者なら躊躇するのは当然である。

『森岡総代の計画を聞いた時、全身が震えるような思いがしましたよ。造塔の機会は稀。百年に一度あるかないかでしょう。私は子供の頃、善通寺や本山寺の五重塔を見上げてはどんな仕組みであの塔は建っているんやろう。自分もいつかはこの手で五重塔を建ててみたいとよく思ったものでした。その遭い難い機縁に遭わせてもらえたのは建築屋冥利に尽きる。』



のちにその時の心境を語ってくれた真鍋氏の言葉である。

自らの力量と経験、そして、可能性を信じ、採算や困難を度外視してたえず未知に挑み、夢を現実のものにしようとする。建築という天職に賭けた一人の人間が持つ、尽きることのない情熱・ロマンを感じるのである。

塔は日本人の心を象徴するものであるから、後世に立派に引き継がれるべき昭和の五重塔を建立しなければならぬ、との信念のもと、こうして、竹林寺五重塔の建立工事は始まった。昭和52年春のことであった。

私は参詣者に乞われて五重塔の案内・説明をする際、塔が伽藍の中で持つ意味合い、塔の精神といったことや、その高さや規模、工法等に触れると共に、最後に必ず、当山の塔にまつわる

こんなエピソードを付け加えることに

している。それは、昭和55年10月の台風襲来の際の出来事である。当時、工事は終盤に差し掛かり、あとは細部の仕上げや周辺の整備を残すばかりであった。そこへ恐れていた台風がやってきたのである。しかも、コースは本県近く、土佐湾上を東進する。塔が初めて台風に晒される試験の時であった。

工学上の入念な試験、また、棟梁のこれまでの経験、それに基づいて工法にも様々な工夫を凝らしてある。すべてに万全を期しての建立である。心配ないとはいえ、山の上にある、しかも狭い高な建物である。台風接近を聞いて居ても立つてもおられなかったのである。

その日の夕刻、氏は寺に駆けつけるや、すぐさま塔に登り、以後、暴風叩き

付ける塔の中にこもったまま、とうとう明け方まで降りてはこなかったのである。吹き荒れる強風に揺るぐ塔の中にあつて、氏は心柱の揺れ具合やそれぞれの木組みの状態などを入念に調べた。が、夜半、あまりの風雨の激しさに自らが精魂傾けて造築したこの塔ももはやこれまでかと不安のどん底に叩き込まれたという。

しかし、「負けてなるものか。この塔を倒してなるものか。しかし、もし、その時は塔もろとも倒れて死んでやれ」と五層目内部、心柱の側のわずかな板敷に不動の如く座禅・瞑目して、全てを天に任せてひたすら夜明けを待ったというのである。

塔が完成してからも、氏は台風シーズンともなると必ず来山され、その都度、塔の中に入つては隈無く点検する

ことを欠かさなかった。夏のことである。風も入らない塔の中では、たちまち汗まみれとなる。しかし、全身の汗を厭うことなく、氏はいつも丹念に点検を続けられた。そうして点検終わり、境内にじっと立ちつくしたまま、いつまでも塔の姿を仰ぎ見る氏の顔にはいつも祈りに似た表情があつたように思うのである。

『もうすぐ台風がやってくるぞ。頑張れよ。しっかり耐えてくれよ。』と塔に言い聞かせながら、同時に、不安・怖れに負けまいと自分自身にも言い聞かせていたのではないだろうか。そこには我が子を愛しみ、かつ、案じる親の祈りの眼があつたように思うのである。建て終えられ、人の手を離れた途端、無数の用材によつて組み立てられた一個の建造物という形を離れて、塔はみ仏の生命を有する。心血を注いで打ち建てた塔は氏にとつて尊いみ仏の姿であつた。そして、それは自身の分身であつた。また、我が子のごときものであつた。

「歴史はつくるもの」――これは氏との語らいの中でよく耳にした言葉である。建築という、いわばものづくりに携わってきた人間の気概・自負がよく表れた言葉だと思ふ。

(次ページへ続く)



五台山竹林寺住職

海老塚 和秀 氏
Ebizuka wasyu

— この五重塔の建立は、竹林寺の代々の悲願だったということですが…。

住職「先々代、先代と当山の復興・整備計画を進めてきて、その総仕上げがこの塔の建立だったんです。特に先代は、自分の時にやり遂げたい、という夢があったようで、その夢を森岡総代が語ってくれたことがあります。」

— 元々この場所に、五重塔があったのですか？

住職「いえ、もっと低い位置、見下ろす位置に三重の塔がありました。五重塔はこの場所ではなかったようです。」

— では、なぜこの、一番風のよく当たる場所に？

住職「それは富士建設の先代社長が…。(笑)ただ、塔は見上げ、祈るためのもので、見下ろすものではないですから、この場所で良いと思っています。風のよく当たる場所でも、ここが良い。これもロマンでしょうか。それに、ここは地盤が岩盤で、高層ビルを建てても大丈夫なくらい、しっかりしているそうです。」

— 再建に当たって、印象に残った人は？

住職「私は学生でしたから…。でも、やはり皆さま熱い人たちでしたね。森岡総代、真鍋さん、岩上棟梁…。森岡さんは、『あの頃(塔を再建するために走り回っていた頃)が、自分の青春だった。』と言っていました。」

海老塚住職との お話しから… 「志」を引き継ぐ、「想い」を受け継ぐ。

— 先代の夢を引き継いで塔を建立されたわけですが、その当時はどんなお気持ちでしたか？

住職「誇らしいとか、そういった気持ちよりも、塔の存在を、重荷に感じていました。当時、私はわずか21歳。住職と学生の二足の草鞋で、『自分がこの寺を継ぐことが本当に出来るんだろうか?』と不安でした。学生なんて、まだ人生経験もないし、皆さまに話してできるほどのことも無い。とにかく『笑われないようにしよう。』『軽く見られないように、この寺の住職に相応しいと思われるようにしよう。』と、虚勢を張っていました。そんな中で、さらに五重塔を建立しそれを預かる身になることは、実は重荷でしたね。」

— 今、塔については、どういうお気持ちですか？

住職「この塔には、森岡総代をはじめ、真鍋さんや岩上棟梁や、みんなの志、思いが係っている。塔の心柱はお釈迦様だ、というけれど、うちの塔の心柱は真鍋さん達かもしれない。先代住職も、しがみついているかもしれない。(笑)私自身も塔と一緒に歩んできたし、たとえば二百年後、三百年後、解体修理の話などが出たとして、そのときにも、この塔に係わったひとたちの想いは残っている、語り継がれていくかもしれない、ということを、大切に思います。」

— 台風時の逸話を今も参拝客にお話しして下さるそうですが…。

住職「今でも、台風のシーズンになれば、富士建設の人が、大丈夫かどうか検査に来てくれます。でもね、それとは別に、『いよいよ明日台風が襲来するぞ。』という時には、私ともう一人くらいで、塔の中へ検査に入ります。検査、といっても私に分かるのは扉の鍵くらいで、実際には構造など分かりません。ですが、その検査は、うちへ来るたびに一時間もの間、じっと塔を眺めていた、真鍋さんの代わりをやっているつもりなんです。真鍋さんの志を思い出して、塔の内部をひとつひとつ丁寧に眺めていく。そうすると、台風が来ても大丈夫、耐えられる、と思えてくる。竹林寺の台風よけの【まじない】みたいなものです。」



五台山竹林寺へのアクセス

高知駅から **MY選バス** で 26 分
 (土日祝日のみ運行)
 高知自動車道高知 I.C から約 20 分
 はりまや橋から 約 20 分
 桂浜 (浦戸大橋) から 約 30 分
 〒781-8125 高知市五台山 3577
 TEL 088-882-3085

「建立後三十年近く経った今でも、大晦日には寺に参り、新年をここで迎えます。今年も頑張ろうって、初心に戻れるんですよ。」と弊社の現社長は言います。
 皆さまも初詣にぜひ訪れてみませんか。

【五台山竹林寺について】

当山は神亀元年 (724)、聖武天皇 (しょうむてんのう) の勅願 (ちよくがん) を奉じた行基 (ぎょうき) により唐の五台山 (ごだいさん) になぞらえ開創されました。

開創の縁起には、時の帝・聖武天皇が文殊菩薩 (もんじゅぼさつ) の霊場として名高い大唐の五台山に登り、かの地で親しく文殊菩薩から教えを授かるといふ夢をご覧になりました。そこで帝は、行基に日本国中よりかの大唐五台山に似た霊地を探し、伽藍 (がらん) を建立するように命ぜられたのでした。

かくして、土佐のこの地が選ばれ、行基自ら謹刻した文殊菩薩像を本尊とし当山は開創されたと伝えられています。

時代は下り、大同年間 (806~809) には弘法大師が四国回国の砌、当山に錫 (しゃく) を留めて修行され、この由縁をもって、当山はのちに四国霊場第三十一番札所に定められることとなりました。

その後、時代を経て江戸時代に至っては、土佐代々藩主の帰依を受け、藩主祈願寺として寺運は隆盛。堂塔は土佐随一の莊嚴を誇り、学侶が雲集し、学山 (がくざん) (学問寺) として当地における宗教・文化の中心的役割を担うに至りました。今日、土佐の民謡「よさこい節」で広く親しまれています純信 (じゅんしん) ・お馬の恋物語。その僧・純信も江戸時代末、当山の脇坊・南の坊に住む修行僧のひとりでした。

しかし、明治初頭の廃仏毀釈 (はいぶつきしゃく) の難は当山といえどもこれを避け難く、寺運は一時衰微しましたが、その後、かつての寺観を取り戻すべく伽藍の復興整備を進め、ようやく往古の輪奐 (りんかん) に復するに至りました。

今日、み仏を拝す人々の参詣の香煙は絶えることなく、また、緑豊かな寺域は四季の自然の折々を楽しむ人々の憩いの場としても広く親しまれています。



「竹林寺塔記」

—五重塔再建の記録と塔の源流—

仏塔の歴史から塔の構造、詳細な図面まで、「五重塔」に関する実際的な情報はもちろん、図面や仕口の図は眺めるだけでも美しいものです。

(お問い合わせ：
富士建設株式会社まで)

「物語のある建築」を募集しています。

『建築』を通じて富士建設と係わった思い出を、ぜひお聞かせ下さい。

(担当者：真鍋有紀子)

TEL 0120-832589

Mail y-manabe@fujikensetsu.jp

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(1)【お正月の迎え方】

【床の間のある空間／織部床／鏡餅】

お正月と言えば「鏡餅」。でも、床の間も神棚もないから飾らない、という方に、ちよつと楽しい情報を。それは、「織部床」という方法です。まず、床の間に見立てるための空間の場所、幅を決めます。その幅に合わせて、和紙を30センチくらいの高さに切り、「床」としたい位置の壁に、天井から和紙を貼り付けます。これで、簡易床（織部床）の出来上がり。



鏡餅を飾る位置は、いわゆる「本勝手」と言われる、床柱が左にある床の場合、鏡餅を真ん中に、屠蘇器を右に、花を左に飾ります。「織部床」の場合は、同じく鏡餅を真ん中に、部屋の外に近い方（窓側等）に屠蘇器、反対側に、お花となります。

さて、飾る際には三方に平木の盆を載せ、半紙を折った上にお餅、という順序が基本ですが、そのとき、お盆の「綴じ目」は、「丸前 角向こう」が正面ですから、綴じ目のない方が、手前になります。（半紙の「わ」も手前へ。）

これは、神様へは「飾る」、仏様へは、「供える」ことから来た慣習。神様の場合は、「自分から見える方を美しくする」と覚えるとうよいそう。

その他、鏡餅に添える飾り物として、裏白、橙、干し柿等ありますが、これについては、とくに決まりはなく、裏白は、「裏がない、後ろ暗い

ところがない。」。橙は、「代々子孫繁栄。」。干し柿は、「いつもニコニコ仲睦まじく。（両端が）2個2個、中6つまじく。」などといった理由から添えられます。

つまり、幸せを招きそうな、“だじゃれ”というわけです。

【お屠蘇】

お屠蘇とは、新年にいただく、いわゆる「薬酒」。

中に入っているのは、一般的に『山椒・細辛（ウスバサイシン）・防風・肉桂・乾薑・白朮（オケラ）・桔梗…』だそうです。

三国志ファンの方ならお馴染み・華陀の案による薬酒とされ、「邪気を屠り魂を蘇らせる」意味から、「屠蘇」という、なんだか物騒な字を書くのですネ。つまり、1700年前から、飲まれつづけているのです。

また、もともと屠蘇散を包んでいた紙は「宝冠」といつて三角に折つたもの。これも本来は「魔除け」の意味のある、大事な形です。

「あれって甘すぎるナ。」「匂いがチョット・・・」とお思いのかたに、美味しい配合を教えてくださいましたので、書いておきますね。酒1合に対し、みりんが10%くらい。

それに1パックを浸し、紅白歌合戦が終わる頃に作り始めると、朝にはバッチリだそう。

一〇〇九年もお屠蘇を飲んで邪気を屠り、

健康に幸せにお過ごしください。



「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を遊ぶ。(1)【花びら餅で抹茶を一服】

外国人向けの本によると、日本の冬の風物詩は「年越しそば、もちつき、除夜の鐘、破魔矢、門松、注連飾り、鏡餅、年賀状、お年玉、おせち料理、お屠蘇、雑煮、重箱、羽根つき、コマ、凧、双六、福笑い、かるた、いろはかるた、花札」だそう。…そんなわけで、今回は付録に「福笑い」を作ってみました。「笑う門には福来たる」、気持ちの良い笑いをどうぞ！

そして、和やかな時間のあとは、新春ならではの「おやつ」を。茶の湯のお席でも初釜に使われることの多い、「花びら餅」。レシピを載せておきますので、新春限定のこの宮中縁の御菓子と一緒に、抹茶を一服…なんて幸せな時間はいかがですか。



元々600年も前よりあった宮中のおせち料理の一つで、長寿を願い、餅の上に赤い菱餅を敷き、その上に猪肉や大根、鮎の塩漬け、瓜などをのせて食べていたという。後だんだん簡略化され、餅の中に食品を包んだもの（宮中雑煮とよばれた）になり、さらには鮎はごぼうに、雑煮は餅と味噌餡を模したものとなった。

【はなびらもち】

★材料 5 個分

片栗粉……適宜

<求肥の生地>

白玉粉……50g / 砂糖……80g / 水……90cc

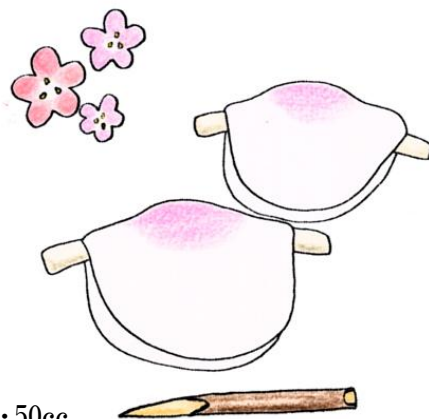
<あん>

白あん……50g / 白みそ……適宜 / はちみつ…小さじ1

食紅……水で溶いたもの少々

<煮ごぼう>

ごぼう……10cm×5mm 程度を 5 本 / 砂糖……50g / 水……50cc



- (1)ボウルに水と白玉粉を入れて、よく混ぜ合わせる。これを裏漉しして鍋で煮ながら、砂糖を2～3回に分けて加える。
- (2)バットの上に、片栗粉を薄くふるい、その上に、(1)の生地を、大さじ1の割合で落としていく。その上からさらに片栗粉をまぶし、しばらく冷ましておく。
- (3)鍋に、白あん、白みそ(好みの風味に仕上げる程度の量)、はちみつを入れて練り込み、食紅を足して薄ピンクに仕上げる。
- (4)(2)の求肥をめん棒などで楕円にのばしておく。
- (5)ごぼうの両端を糸で束ね、米のとぎ汁でやわらかくゆでて、アク抜きをしておく。砂糖、水を鍋で煮立て、ごぼうを入れ、煮汁が半分程度に減るまで煮て、そのまま冷やす。
- (6)(4)の求肥に、(3)の練りあんと(5)の煮ごぼうを挟んで、できあがり。

ある方が言っていました。

「経済はグローバル・スタンダードって言うけれど、文化は、ジャパニーズ・スタンダードでなくちゃ。」

そう自信をもって言えるほどに、

日本の文化は、うつくしいのではないのでしょうか？

日本伝統の美意識を、現代の住まいにプラスする。そして、「住まい自身」の美学と色気を、表現する。

「数寄」とは、「好き」。

飾らず、奢らず、「秘する花」のある空間を。

花ある数寄屋。

わたしたちの「数寄屋風住宅」は、すべて、住まい手の美学の表れる、「注文」建築です。

まず、皆さまご自身の生き方、美学を、お聞かせください。



そんな「数寄屋」空間の魅力を、「品格」「調和」「色気」

「遊び」「技・材」をキーワードに、毎号、ご紹介していきます。



日本人は昔から、「美」や「魅力」を象徴することばとして、

「花」という言葉を用いてきました。では、「数寄屋」の「花」とは？

ビジネスで養われた理想、そこから生まれた自身の品格を、住まいに反映させる。

◎「花」とは… 「品格」

もともと「空間を広く見せる」ことから始まった数寄屋。「数寄屋風住宅」では、家の大きさ、柱の太さ、部屋の広さ、天井の高さなど、全体のバランスを考えながら、威圧的にならず、軽やかにすっきりと見えるよう、各部の寸法を決めています。

「趣味とは近代日本人のそなうべき教養である。」と語った、近代数寄者に習う。

◎「花」とは… 「遊び」

ただ守るだけでも、大切にすることもない。伝統文化や、日本独自の美意識を、自分なりにアレンジして、「遊ぶ」。そんな大人の余裕が、日本の文化を守り、根付かせることにつながります。



抑えた表現に大人の色気を見る。

◎「花」とは… 「色気」

抑えた中にある華やかさは、なんとも言えない色気を醸し出します。そんな色気を感じられることは、大人の特権なのかもしれない、と思います。



ただ無難に終わるのではない、心地よい緊張感。

◎「花」とは… 「調和」

その家の建つ周りの風景と、家とが、互いを引き立て合うこと。それぞれの部材が、魅力を引き出し合い、ひとつの空間を作り上げていること。そこに暮らすひとたちのライフスタイルを、さらに引き立て、豊かにすること。「調和」とは、そんな「引き立て合う」関係を指すのだと思っています。



次の世代へ、豊かな選択肢を。

◎「花」とは… 「技・材」

数寄屋風住宅を建てるには、大工をはじめ、木材・瓦・建具・畳など、さまざまな職人の受け継がれた「技」と「美意識」が必要です。ですが、そのような人たちも今では歳をとり、減りつつあるのが現状です。今、わたしたちが改めて「数寄屋風住宅」をご提案する意味も、ここにあります。確かに、京都など特別な地域へ行けば、「数寄屋大工」「堂宮大工」は、今もお、またこれからも、その伝統を守りつづけていくことでしょう。でも、「住宅」についてはどうでしょうか。今のわたしたちの世代が無くしてしまったら、「数寄屋風住宅」として、現代の住まいに日本の伝統的な美意識をプラスするという、このバランス感覚・技術は滅び、二度と復活しないかもしれません。

花ある数寄屋（1） 技で色気を表現する。

品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、数寄屋の魅力を紹介します。

「建具」

日本人は、自然と融和することを望んで、開放的な建物を良しとし、自然が取り込まれた生活を楽しんできました。そこで大切な役割を果たすのが、内に居ながら外を感じさせる建具、障子です。

遮光、通風ができて、しかも断熱性があり、優しく美しく、人の心を和らげる不思議な機能を持つ障子。材料は国産材、外国産材を問わず、良質であることが必要です。そして

その中からさらに、木目、色、ねじれ、そりなどを見て材料を選びます。長い経験と木の個性を知り尽くした熟練者の目が欠かせません。組子の形は使う人の好みでどのような作れ、寸法は建物に合わせて作れます。

加工・組み立ての順に行程が進みます。この作業は、修行を積んだ技術者の技と道具類が一体となり行われます。

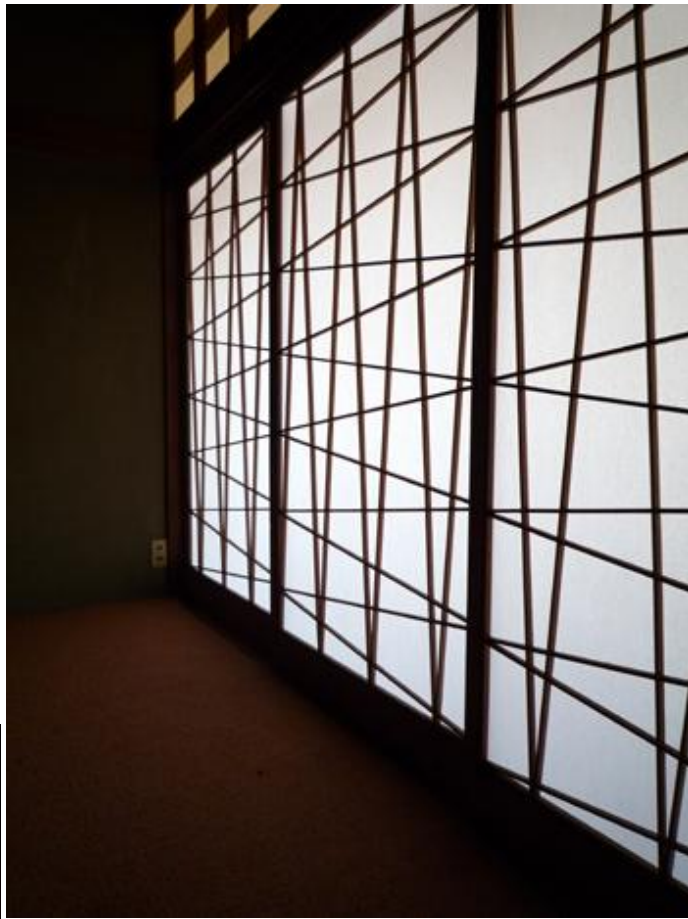
ます。

障子は建具の中でも最も細く、薄く木材を加工するので取扱いに気を遣います。道具の手入れも行き届いていなければいけません。

自然の材料を最もシンプルな形にした障子だからこそ、木、紙、天然素材をどう生かすか、創るものの腕にかかってくるのです。

寺神建築のように畏まった重い感じではなく、数寄屋建築に合う、軽さを身上とする細い線でシンプルなデザイン。

富士建設が昔から使っていた寸法は、上棧と縦框との取り合い、薄含み棧、紙貼じゃくり、框、上・下棧に紙の厚み分のしゃくりを付けるなど、最もすっきりとした納まりです。



細い棧の感じさせるリズム、差し込むほのかな陽射し。穏やかで、また時にはハッとするような艶やかさ、色気を醸し出すのが、「障子」などの建具です。

そんな「障子」について、仁尾町・喜田木工所の喜田忠則さんにお話を聞きました。



<喜田木工所>

昭和 22 年創業

「住む人が快適に使用でき、木のぬくもりがある建具を届けたい。」「住む人と共に生活していく上で大切に使ってほしい。」

三豊市仁尾町仁尾丁 1173

TEL 0875-82-2236

FAX 0875-82-4878

中津万象園 「花の歳時記（1）梅」

如月は暦の上では春を迎えますが、瀬戸の内海から吹き付ける寒風は松籟をともしない、寒さは益々厳しくなっています。

このような時、寒さにも負けず力いっぱい咲いている花に巡り会うと、急にうれしくなります。その花の一つが、「春告げ草」の別名を持つ梅の花であります。中津万象園では八景池の南岸の茶室・母屋の東側の路地や園内各所で紅梅や白梅に巡り会うことができます。

梅は桜と共に古来より日本人に親しまれ愛されていた花で、万葉集に数多く歌われています。しかし、桜の原産地が日本であるのに対して、梅の原産地は中国であることはあまり知られていません。

梅が中国から渡来したのは7世紀後半で、中国では烏梅『ウメイ』と発音されていました。この呼び名で渡来し、日本国内で訛って発音されてウメになったと考えられています。当時の梅は白梅で、紅梅が渡来した



虚室煎茶霽乍颺 照砌月移疎竹影
穿幃風送早梅香 牀頭黙座挑燈火

一人茶室で茶を点てていると霽が風に吹き上げられ、石畳を照らしていた月が竹の風に見え隠れしている。

幃（たれ衣）が風で大きく揺れると寒紅梅の香りが茶室にみなぎった。私は静かに正座し燈火を明るくして、梅の香りを楽しんだ。

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路
坂出北ICより約 8.5km／約 15 分
坂出ICより約 14km／約 20 分
高速道路善通寺ICより約 5km 約 10 分



長岡 公 氏

昭和 2 年 10 月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和 26 年 3 月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和 26 年 4 月以降 香川県高率高等学校教員として主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和 63 年 3 月 定年退職 香川西高等学校教頭
現 在 (財) 中津万象園保勝会 理事

※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林・玉藻編／中・西讃編）がある。

【中津万象園

茶会のお知らせ

「楽しくて洒落ていて、美的なもの。」

…それが、「茶の湯」をコンセプトに、

「忙」の楽しさと「閑」の豊かさを知る。

『大人』の男性のための、遊びの会を設けました。

一期一会の別世界へ、ぜひお越し下さいませ。

平成二十一年二月七日（土）

午前十一時より午後二時頃

場所 中津万象園・丸亀美術館 母屋

会費 壹万円

※ 詳細はお問い合わせ下さい。



【編集後記】

この通信を作るに当たって、三つの思いがありました。

ひとつ目は、大好きな建設業という仕事に携わることの幸せを、皆さまにもおすそ分けしたかったこと。（「物語のある建築」シリーズがそれです。）

二つ目は、おすそ分けを通して、私たちの事を好きになってもらいたかったこと。

三つ目は、暮らしの器である「建物」という商品を提案する企業として、「日本の文化の遊び方」の提案をしたかったこと。

以前、ある講演会で、「今『格差社会』という言葉が使われているけれど、これから確実に『格差』はもっとひどくなる。但しそれは、経済的な格差ではなく、文化の格差だ。」ということを聴きました。

「文化の格差」。…いったい「文化」って、なんだろう？ 広辞苑で調べてみると、

「文化」とは「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住を始め技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。人間の精神的・内面的な生活にかかわるものを文明と区別して文化と呼ぶ。」とありました。

この「文化」に、格差ができる。それはつまり人間の生活や内面の豊かさに差が出るということですよ？

もちろん、建築も文化です。日本人の美意識は繊細で、木目ひとつにも美を見出し、たった二畳の空間においてさえ、天井の高低、素材の違いで、そこでもてなす客への尊敬の気持ちを表現したりします。石や木や土を使って水を表したり、禅の精神を象徴させたりもします。こういった心や美意識の背後には、それまでの年月の中で集積された文化があり、ひとつひとつの「建築物」は、計り知れない楽しさ、豊かさを持っています。

自然界にある木や石は、ただそこにあれば無理が無く、それだけで美しいものです。ですが、それに人為的に手を加えることで、さらに美しくもなれば他人の目を惹きつけるものともなりえ、そこに居る人々のところを癒し、精神の豊かさを感じさせ、命を守り、生活を守ることもできるので

文化の集大成であり、風景をつくり、命を守る、「建築物」。この素晴らしい「建築」に携わる者として、自分たちの仕事がどれほど責任重大なものなのか、常に肝に銘じて心して係わっていきたくと考えております。皆さま、今後とも、何卒御指導のほどをよろしくお願い致します。

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



建設業許可：香川県知事許可（特 18）第 189 号／一級建築士事務所：香川県知事登録 第 416 号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第 1997 号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101

三豊市詫間町詫間 300 番地 1

TEL0875-83-2588(0120-832589)

FAX0875-83-5864

http://www.fujikensetsu.jp

mail y-manabe@fujikensetsu.jp（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、

「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物を

はじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。

また、県下において 1300 区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭